学校支援を積極的に進めよう

～保護者と教師が共に手を携え、子どもたちの健やかな成長を支える～

豊川市立小坂井中学校ＰＴＡ

１　学区及び学校の概要

本校は、名鉄名古屋本線伊奈駅の目の前にある。学区にはＪＲ飯田線、ＪＲ東海道本線の駅もあり、また、旧東海道に並進する国道１号線も通るなど、交通の便がとても良い。

今年度の全校生徒数は５９３名、学級数は特別支援学級８学級を含んで２４学級ある中規模校である。校訓「自主」と「誓いの言葉」を全生活領域で具現化し、実践力のある、心身ともに健全な生徒の育成を期している。

２　研究のねらい

「小坂井中学校父母教師会（略称；坂中ＰＴＡ）は、生徒の健全な成長を図るため、家庭・学校及び社会における教育の推進に努めることを目的としている」【坂中ＰＴＡ会則　第３条】

小坂井中学校に通うすべての子どもたちが、『安全・安心して学校生活を送ることができる』ために、保護者と学校が協力して支えていきたいと考え、本研究に取り組んだ。

３　研究の仮説

坂中ＰＴＡの年間活動として、ＰＴＡ本部役員、子どもたち、保護者、学校が積極的な関わりをもてる厳選した諸事業を実践することで、各ＰＴＡ事業に対する保護者の理解が深まり、学校と協力して子どもたちの健やかな成長を支えようとする気持ちの高まりにつながるだろう。

４　研究の方法

坂中ＰＴＡ事業「坂中オリジナルタオル販売」「坂想文庫貸出キャンペーン」「学校保健委員会」などを通じて、ＰＴＡ本部役員、子どもたち、保護者、学校が互いに関わったり触れ合ったりする機会をもつ。各事業における実際の様子や保護者の感想、子どもたちの振り返りなどから、効果の検証を行う。

５　研究の実践

（１）坂中オリジナルタオルの準備と販売

「坂中オリジナルタオル」は２００９年度、当時のＰＴＡ会長の発案で誕生した。「小坂井中学校への愛着をもってほしい。坂中生であることに誇りをもってほしい。」という願いからである。全部で１２種類あり、年に２回（５月と９月）、本部役員が業者への発注、１枚ずつ個装、注文票の準備などを進めている。販売日当日は、注文票をもとに坂中オリジナルタオルをクラスごとに袋詰めしたり、代金の集計をしたりしている。毎年、学級色の坂中オリジナルタオルを購入し、体育大会で

は、学級の仲間を応援する道具の１つとして活用されている。学級への帰属意識をもつことや学級での居場所づくり、仲間との絆づくりに欠かせない存在となっている。

今年度で１７年目になるが、今でも卒業生が「購入したい」と訪れるなど、小坂井中学校への愛着、坂中生として誇りをもつことにつながる伝統的な取組となっている。

（２）坂想文庫貸出キャンペーン

「坂想文庫貸出キャンペーン」の取組が始まった経緯は、２０１５年度の全国学力状況調査質問紙の回答結果より、小坂井中学校における『２０％問題』が浮き彫りとなったことである。具体的には、

①「テレビゲームやＳＮＳを１日２時間から４時間、家でやっている生徒」

②「読書をまったくしない生徒」

が、ともに全国よりも２０％も多いことがわかった。そこで当時のＰＴＡと学校とで本取組が企画され、現在に至っている。具体的には、保護者として、伝えたくても伝えられていない想い、人生の先輩としての想いを、メッセージを添えた本に託して「想いを形」にし、子どもたちの読書経験や人間形成に役立てばと考えられた取組である。今年度も、寄贈していただいた本を朝読書や読書週間の時期だけでなく、日常的に貸出すことで、子どもたちが本に触れる機会や読書する時間を増やすことに寄与している。

（４）学校保健委員会「ピタチョコ歯みがき」

５月１６日（金）に、学校保健委員会が開催され、ＰＴＡ委員（厚生部）と希望した保護者が参加した。保健センターの方を講師に招き、「歯と口の健康」について学習した。子どもたちの振り返りには、「ピタチョコ歯みがきとは、歯に歯ブラシをくっつけてコチョコチョ左右に動かすみがき方ということがわかりました。歯の健康は、体やスポーツにつながると初めて知ったので、歯を大切にしたいです。」と書かれてあった。また、参加した保護者の振り返りには「家で娘と一緒に歯みがきをする機会をもちたいです。」と書かれてあるなど、有意義な時間となった。

６　研究の考察

保護者の理解と協力が各事業を盛り上げ、学校支援につながっている。子どもたちを軸に保護者と教師が顔を合わせて共に活動し、交流を深められたことは、今年度のＰＴＡスローガン『ＦＡＣＥ　ＴＯ　ＦＡＣＥ　～想いをリアルに！叶える明日～』に迫ることができたと考える。

７　成果と今後の課題

小坂井中学校に通うすべての子どもたちが、『安全・安心して学校生活を送ることができる』ことに迫ることができた。一方、目的や意義、伝統などを大切にしつつ、各事業の見直しやブラッシュアップを図る必要性も感じる。負担感のない活動や参加しやすい方法を模索したい。